

諜報員 (1948)

PODVIG RAZVEDCHIKA

メディア 映画

ジャンル

製作国 ウクライナ

色彩 B&W

時間 93分

初公開日 1992/12/19

公開情報 国際シネマ・ライブラリー提供／シネセゾン

【解説】

天才バルネットの戦後最初の作品は、まるでフリッツ・ラングを想わず、反ナチ活劇の快作である。アメリカ映画からの影響を隠そうともしない簡明なストーリー・テリングがぞくぞくするほど冴えたこの映画は、内容が内容だけにスターリン賞を受けたが、そんないかめしい所は微塵も感じさせない。ナチ将校の描き方すら教条的なものとは縁遠く、ちょうどラングの「マン・ハント」のジョージ・サンダースのようにスマートなのだ。

ドイツ諜報員シチュービングがモスクワで捕まる。指揮官ルンメスブルグの名を吐いて彼は逃走。アレクセイ少佐は敵指揮官の情報を得るため敵陣レッツェン市に潜入、東方経済センター代表エッケルトを名乗り、商会代表ボンペルと会見するうち、その息子で指揮官副官のヴィリと親しくなる。片や敵将は、収容所にウクライナ出身の男を捕虜将校として潜入させる。そのベレジノイ大尉は間もなく、ナチス司令部に更に近づこうというエッケルトが赴いたヴィニンツアに逃亡。そこで偶然ソ連より逃れたシチュービングと出会ったエッケルトは彼の裏切りをネタに、同市内に潜伏する味方の地下組織員の構成を探らせ、レシューク、ベレジノイ、スターホフの三名の名前が出る。この中の誰かが内通者なのだ。まずレシュークに、ナチ将校に化けて会うが、これがルンメスブルグに知れ、彼は消された。そこでベレジノイを罠にかけニセの情報を与えると、案の定、尻尾を出したので、これを処刑。そして、いよいよ司令総本部壊滅に向けて動くエッケルト＝アレクセイだった……。

元俳優であったバルネット自身が独軍将軍キューンに扮し貫禄を見せ、主演のカードチニコフの若き日の名演ー特に敵将校に化けての気品が素晴らしい。ともかくスピーディかつサスペンフル。それでいて、後半の処刑シーンのセットなど表現主義的な面白さもあった。

【クレジット】

| | | |
|----|--|------------------|
| 監督 | ボリス・バルネット | Boris Barnett |
| 脚本 | ミハイル・ブレイマン コンスタンティン・イサーエフ ミハイル・マクリャルスキー | |
| 撮影 | ダニール・デムツキー | Daniil Demutskii |
| 音楽 | D・クレバーノフ | |
| 出演 | ミハイル・ロマノフ パヴェル・カドチニコフ V・ウレーソフ P・アルジャノフ セルゲイ・マルチンソン | Sergei Martinson |